opusdei.org

## 日本でのオプス・デ イ女子部の始まり

「アフリカとアジアでオプス・デイ女子部の使徒職を開始する計画があるのでそのために祈るように」。1960年2月14日、オプス・デイ女子部の創立記念日のごミサの説教で、創立者は伝えた。

2008/10/19

日本でのオプス・デイ女子部の始ま り

「アフリカとアジアでオプス・デイ 女子部の使徒職を開始する計画があ るのでそのために祈るようにし。 1960年2月14日、オプス・デイ女子 部の創立記念日のごミサの説教で、 創立者は伝えた。早速、だんらんで この「遠国」のことを知ろうと、ケ ニアと日本のスライドを選び出し準 備した。そのだんらんの少し前に、 聖ホセマリア自ら、当時ローマの本 部で働いていた補佐ヌメラリー、マ ルハ・カベロ、フリタ・フェルナン デスとイレネ・ルビオに、「もしよ ければ、日本に行ってもらえない か」と頼まれた。一方、日本に行く ことを打診する予定であったヌメラ リーは、当時、様々な国に住んでい た。今は天国にいるスペイン人のマ リア・テレサ・バルデスはアイルラ ンドに、アイルランド人のキャサリ ン・パーセルはイギリスに、アメリ カ人のマーガレット・トゥラバース はミルオーキーに、パラグァイの最 初の女子メンバーであるアナ・マリ

ア・ブルンはフランスに住んでいた。皆、創立者の打診に喜んで応じ、それぞれの国で、胸躍らせ、これから使徒職を展開する新しい国に関する資料を探し始めた。

ニヶ月後の1960年4月、ケニアと日 本に行く人たちのために特別の研修 会がローマで始まった。創立者は到 着する人たちを愛情深く出迎え、17 日の復活祭のごミサの説教で創立者 は、誠実で信心深い生活を送るよう にと彼女たちを励ました。心から誠 実であるなら素晴らしい仕事ができ ると強調し、一年以内に、もう召し 出しがあったという知らせを受け取 ることを確信しているとおっしゃっ た。また、皆が「堅固で確信に満 ち、明るく誠実で | あるようにミサ 聖祭を捧げてくださった。

4月22日には、次のように話した。 「お金の不足からすべきことを疎か にしてはなりません。それは、私た ちの精神ではないばかりか、献身や本 信心の不足に由来することだささい人であってくだささい人であってくだささいは豊かな祝福を送れる召出ととない。 は豊かな祝福を送れる召出してが働くない。 はないでもないです。 はいいです。 が動きにいいまするでしたらです。 のみ旨だからです。 のかしまがもたらでするでしたらです。 を見る喜びを与えて下さる。」

創立者は、私たちが5月に出発することを望んでおられたがビザが降りなかった。6月になっても未だ降りていなかったが、「きっと大丈夫」という創立者の信仰で、香港で受け取れるよう手配し、6月に出発することになった。

6月13日早朝、ラオス号出港地のマルセーユに向けて汽車でローマを出発。32日間の船旅の間、私たちが毎日ごミサにあずかることができるよ

うにとの聖ホセマリアの配慮で、その船には日本まで行く司祭が乗船することを確かめた上での6月出発であったということを後で知った。

1960月6月14日正午、ラオス号は、 岸壁を離れ、ついに長い旅が始まっ た。寄港するたびに下船し教会を探 し、聖体訪問をした。またローマに 宛てた手紙や葉書を投函し、また ローマからの便りを受け取った。 ポートサイドで受け取ったエンカル ニタ・オルテガの手紙には、ローマ 出発の朝、聖ホセマリアは、みんな が頻繁に行きかうビラ・サケティの 廊下にある聖母像の前のローソクに 火をともし、日本についたという知 らせが来るまでは、ずっと灯し続け て皆で祈るようにと勧められたとい うことが書いてあり感動した。旅行 中、同乗の日本人から日本語を習っ たり、持ち合わせていた「日本語独 習書 | という本に出てくる簡単な文 章を暗記したりして、みんなで日本 語の勉強を必死にした。

6月14日のマルセーユを皮切りに、 17日ポートサイド、21日アデン、25 日ボンベイ、27日と28日コロンボ、 7月2日シンガポール、4日から7日サ イゴン、9日マニラ、11日と12日香 港…そして、15日、ついに神戸港、 日本に到着!

さんの兄弟である司祭にお願いした (…)」と話されていたことを思い出した。当座必要となる食器や家財道具を揃えてくれていた日本の友人達は、皆のことを思いやりながら楽しく準備したよ、と後になって話してくれた。

祭壇には、聖ホセマリアが日本のた めに作られたSancta Maria, Stella Maris, filias tuas adiuva (海の星な る聖マリア、あなたの娘たちをお守 りください)という射祷が彫り込ま れていた。早速そこにご聖櫃を設 置、明朝、カルメンの聖母の祝日 に、日本での最初のごミサが行われ た。ミサ前の説教では、「夢を見な さい、そうしたら思ってもいないこ とすら実現します | という聖ホセマ リアの言葉が引用され、このお聖堂 が神に近づく日本女性で溢れること を、みんな夢見た。また、聖ホセマ リアが「もし皆さんが忠実であるな ら、一年以内に、パドレ、召し出し

がありました」ときっと私に知らせてくれるでしょう…」とローマでおっしゃったことを思い出した。

同じ夏、聖ホセマリアはロンドンに 滞在、共に仕事をしていた女子部の 中央秘書エンカルニタから度々手紙 を受け取ったが、一度は聖ホセマリ ア直筆で「御地での仕事開始おめで とう、日本の娘たちを祝福します。 マリアノーまた、ドン・アルバロも 「あなたたちとあなたたちが接して いる皆さんのために愛情を込めてお 祈りしています。皆さんの仕事に多 くの実りと喜びをもたらしてくださ るよう主にお願いしています。アル バローと書かれたものが同封して あった。

聖ホセマリアの愛情と心配りは、それでも未だ足りないかのように、9月1日の真夜中、ロンドンから電話をかけてくださった。受話器を取ったマリア・テレサの耳に入ったのは

「ロンドンから」という交換手の声。「誰ですか。」「某です。」「喜んでいますか。喜んでいますね。」「はい、パドレ。」「神の祝福があるように。次の人に替わってください。」こうして順番に。最後にマルハと話し終えたとき、3分間にはまだ少し時間があったので、マルハはドン・アルバロにも挨拶できた。

この使徒職開始の時期、スペインのスーパーヌメラリーや協力者に、定期的に献金を、そして冬になる前には船便で毛布や寝具を大量に送っていただき、経済的に大きな援助を受けた。来日時に、お聖堂のための祭具や祭服を準備してくれたのも彼女たちだった。

来日当初、西洋料理やインテリアの クラスを始めたが、外国語への関心 が強いことに気づき、外国語クラス を始める。午前中は主婦、午後は中 高生、夜は大学生のため、土曜日は 小学生のための英語、フランス語、 スペイン語のクラスを始めた。マリ ア・テレサはテレビのスペイン語講 座を受け持ったりもした。翌年には ロレッタがアメリカからきて加わ り、夙川塾(後ほど夙川スクールに改 名)での外国語の生徒は日増しに増 え、教室やLL教室をの増改築も行っ た。この頃の生徒たちは皆の良き友 人となり、買い物に付き合ってくれ たり、食材持参で和食の調理法を教 えてくれたり、電気製品の説明書を 訳してくれたりと、労を惜しまず助 けてくださった。文化交流も活発 で、夙川スクールでは外国語のクラ ス以外にも英語での団欒やカトリッ クの教えに関する講話も始め、洗礼 を受ける人もいた。

フランス語のクラスの生徒だった喜 久子さんは、同じ西宮市に住んでい たので、電話で助けを頼むといつで も飛んできてくれた。そして、1961 年、ヌメラリーとしてオプス・デイ 所属を願い出た。前年には、英子さんが日本最初のスーパーヌメラリと なっていたので、創立者がおっ しゃったとおり、一年以内に「パドレ、召命がありました」と報告がで き、皆、大喜びであった。

なお、夙川スクールでの語学授業は、10年ほど経て、精道塾と合併し、芦屋市にセイドー外国語学院を開校。夙川スクールは1978年、芦屋市に引っ越し、大原文化センターと改名する。

パドレは、他の都市でも使徒職を開始することをお望みになった。第二の都市は、学生の街・京都に学生寮を開くことにした。

1963年の冬、昔、料亭であったという家屋も庭も純日本式の古い大きな家を見つけ、翌年3月、日本で二番目のセンター、下鴨アカデミーを開始。この古い家屋は1969年に、4階

建てのビルに建て直し、鴨川沿いに 堂々とそびえる女子学生会館となっ た。

1964年から、家庭の事情で東京に引っ越したメンバーの形成のため東京への使徒職旅行が始まる。 1965年の秋、聖ホセマリアの願いで、マルハ、フリタとイレネはオーストラリアでの使徒職開始の

日本でのオプス・デイ開始について 振り返ると、神様と聖ホセマリレス ができない。聖ホセを謝してとができない。聖ホセめると、 は、日本でオプス・デイを始ている は、日本でオプス・変する日本で とは神のみ旨であると愛する日本た。 れた。そしてこよなる最初のよれた。 を、大きな祝福と共に送り出された のである。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/ri-ben-denoopusudeinu-zi-bu-noshi-mari/(2025/10/28)